

『現代教育科学』一九六五年二月（明治図書出版）

■教育問題の焦点

全面発達思想のオプティミズム

矢口 新

一

全面発達というのを文字通り解すれば雄大な理想ともいふべきであろう。全面発達の結果、万能の人がつくられる。全智全能の神というのも人間が生み出した理想像であるが、万能の人というのもそれに近い。人間の悲願ともいふべきであろうか。全面発達の文字通り解すれば、やはり人間教育の理想の悲願ともいふべきであろうか。

誰も全智全能の人間を育成することができると思っているものはない。その証拠に高等学校以上になるとコースが分化している。近代教育は近代社会の分業化の上になり立っているから、やはり教育もその前提の上で行なわれているのである。そういう意味では、全面発達でなくして一面発達を目ざしているといつてよいであろう。

ではどうして全面発達思想というものが、いまどき問題になるのであろうか。そういうものがどこかに生きているのであろうか。

現代の教育学の第一頁に出てくる言葉は、人間の教育とか、人間形成とか、円満なる人格とかという言葉がある。こういうことをいう前提には、人間というものが理想的には、まろやかなもので、へんくつなものではないという考え方があろうである。少くとも、そうなりうる存在であるという見方がある。走ることは早い、その他のことでは何もできないとか、社会の集団の中へ入って生きて行くことができないとかいうのは人間としては困るというのである。そういう意味では人間は各方面のことに通じていなくてはならない。全面でなくとも各方面に発達してもらいたいし、しなくてはならないのである。一芸に秀ずるといっても本当に犬や猫の

ような一芸ではこまる。或る水準で高等に秀でていてもらわなくてはならぬ。一通り文字も読み書きできるし、歌も歌えるし、大工仕事もできるし、その他いろいろとやらなくてはならぬことがある。細かくいえば実に数多くのことがある。犬とくらべてみれば、大変な高芸さである。犬と比べて大変失礼だが、話をわかりやすくするために考えてみるのである。犬と比べれば、大変なひいで方だが、人間は誰でも或る平均の所までは一通りはできるのが人間の人間たる所である。人間同士の間では、それは多芸とはいわない。人間として当り前のことであると考えてるが、しかし人間も同じ動物仲間だと考えてみると、他の動物に比べて人間の多芸さはまた格別だということになる。

だから動物仲間の中では、あるいはもっと範囲をせばめて類人猿以上の霊長類仲間に限っても、人間の多芸さは出色であり、まさに全面発達しているのである。

こういう意味では人間の全面発達は理想でもなく、悲願でもなく、まさに現実なのである。考えてみればこれだけ複雑な社会で、ともかく生きて行くのである。毎日の新聞をみても実にさまざまな社会の相が出ている。これを一応切り抜けて行くにはやはり人間

が全面発達しているからであろう。もちろん小数の落伍者もいる。犯罪者などはその落伍者の一種であろうが、そういう人々は数は多いわけではない。だから現代の人間は全面発達しているのだというようにいつてもよいではないか。これは決して皮肉ではない。

この全面発達を成就せしめたものは、結局義務教育だということになる。すべての人が受ける教育が義務教育だからである。そして義務教育はいうまでもなく全面発達を目標として教育を行なつて来たのであろう。とするならまさに義務教育はその理想を達したといつてもよいではないか。こう考えては余り楽天的にすぎるのだろうか。

二

しかし全面発達ということをや右のような程度で考えていれば誠にめでたいことだが、果してそれですまされるだろうか。たとえば教育のレベルと結びつけて考えてみる。小学校も中学校もともに義務教育であるが、共に全面発達を理想としている。そしてその結果どこまで全面発達したであろうか。小学校教育の意図している全面発達と、中学校の意図している全面発達とはどのようなちがひがあると考えたらよいのであろうか。両方とも

全く同じということはあるまい。このちがひはいわゆるレベルのちがひである。これをたとえていえば、円の半径の大きさのちがひと見ることができよう。全面発達であるから、両者とも円のように発達することを目ざしているが、小学校の目標は、中学校にくらべれば、小さい円だということに考えることができよう。

目ざしている目標がちがうのだから、その教育の実態も異なる。つまりレベルの高い教育を行なっている。それだけの教育を行つていふのだから、それにふさわしい結果が得られれば問題はないが、さてその辺はどうだろうか。ここまで考えて来ると、それぞれの教育のレベルにあった全面成達は成しとげられていないのではないかという疑いが生じる。

例えば今の中学校の教育は、それだけのレベルにふさわしい全面成達の効果をあげているのであろうか。これをはかるのはなかなかむづかしいが、多少ちがうかも知れないけれど、昔の中学校の例で考えてみよう。昔の中学校が今の中学校とどのようになつて来たかは細かく論ずると、むづかしくなるが、まあそれ程レベルにちがひはないと考えることができよう。そこで、昔その教育を受けた人た

ちは、今の中学校と同じ教育を二十数年前に受けたと考える。その人には今中学校で教育を受けている子どもがあるとする。子どもが学校で受けている教育に対して、見てやれる親はどれ位いるのであろうか。父親でも、母親でも中学校になつたら、どの教科についてももう子どものことは殆んどみてやれなくなつてゐる。

それはもう全く忘れてゐるということであるかも知れない。だが忘れるというのは、発達しなかつたということではないか。全面どころか、一面も発達してゐないのである。もう少し例をあげて考えてみよう。今の中学校の先生は全面発達しているであらうか。中学校の先生は、それぞれの教科の専門家である。その教科については、生徒に教えることができる。その点については、発達しているのである。しかし、自分の専門の教科以外についてはどうであらうか。恐らく生徒と一緒に試験をうけたら三十点位の点しかとれない。しかし昔中学校時代にはそうではなかつたのである。ちゃんとやつて来たのである。だが今は忘れたのである。つまり忘れるような教育しかうけなかつたのである。

もっとも試験を受ける前にゆつくり試験準備をすれば、今でも相当の点はとれると先

生はいくかも知れない。多分そうであろう。試験を受ける準備をすれば、試験は通るのである。しかしそれは力となっていないから、すぐ忘れるのである。こう考えると、実は試験を受けて通ったから、その教育が終ったとする所に問題があるのではないか。いな、現代の中学校のある教育、つまり一斉授業による先生の解説、そして最後は試験によって終るという教育、そこに忘れる原因があるのでないか。つまり人間を発達させないのでないか。

全面発達の理想のもとに行なわれている教育は、余りにお目出たいというべきではなからうか。

中学校の先生が一教科に限り教えることができるようになるには、中学校卒業後、数年間の勉強がある。そこでは専らその教科を勉強する。この教育も本当には発達させる教育ではないかも知れない。その証拠に、大学卒業したばかりの若い教師では危なかしくて見ておれないことが多い。その後数年間、何回も同じ教科書を使って、教育しながら自分も勉強して、漸く一人前の教師として教えることができるようになるのである。恐らく教えることのくりかえしが、教える力をつくるための勉強になっているのであろう。そう

いう実際の場での責任を与えられるということ、しかもそれをくりかえすということ、中学校の教育のあり方とは全くちがうのである。これは一面的であって、くりかえしの教育であるが、中学校の教育は全面的な教育であって、くりかえしのできない一回しかやらない教材解説である。全面発達をねらった教育は、どこかに落とし穴がありそうである。

三

今の高等学校教育、即ち後期中等教育も、或は更に大学の教育においても全面発達を考えているといってもよいであろう。高等学校の教育はさまざまな課題にわかれる。その点では一面的発達と考えられないこともないが、しかし職業課題における教育の方針も一般教育の上に職業教養を与えようとしている。大学においても、前期二年の教育は一般教養課程となっている。このような点は、全面発達の理想が、現代の教育でいかに強い柱となっているかを物語るものである。

そしてそのことがまた中学校と同様に、それぞれの段階の教育の弱点となっている。高等学校の教育は、ますます教科の分裂主義となる。専門の教師は、他教科のことは全く関心がないといってよい。生徒と競争しても他

の教科では生徒にまけるであろう。そういう教師が十人位集って、一人一人の生徒にみな自分専門の教科について百点をとることを奨励している。全く奇妙なことであるが、それが当り前のこととなっているのである。自分の専門の教科以外は三十点の教師が十人集って、生徒にはみな百点をとることを要求しているのである。矛盾といわずして何というか。全面発達の矛盾というべきであろうか。全面発達の理想はよいが、その方法如何となると、現代の教育はあまりにも単純な考え方をしかしていないのではないか。少し皮肉に言えば、全面発達していない教師が集って生徒にだけ企画発達を要求しているのではないか、一種の親ばかともいえるべきであろうか。

もつともここまで考えて来ると、全面発達とは何かということをもう一度考え直してみなくてはならない。人によっていうであろう。さまざまな教科を教育するのは、何もそれをすべて身につけるということではないと。それを統一するのは生徒であって、それぞれの生徒が自分で、調和させ統一させればよいと。いうがごとくならば、それは個性的統一ともいえるべきものであって、生徒によって、それぞれ異ったプロフィールをもった発達

をすることであろう。それはしかし、一人一人の生徒の全体的統一を考えることであるが、現代の教育は、そういうことを考えた教育でないことは事実が示している。教材の羅列主義であり、分裂主義であり、全くの機械的平均点主義であり、平均点の順位であり、個々の人格の個性が問題になるのではない。

よくいわれることに、一つの道にすぐれたものは、他の道のこともわかるといえることがある。一つの道の名人を知るといわれる。一事は万事ともいう。人間のなすことは、万能というわけにはゆくまいから、一つの道において頂上に達することを考えるほかあるまい。そういうものを中核として、一つの人格をつくるであろう。人々のもつこのような人格の発達は無限にあるといってもよいであろう。その中核となるものは、恐らく広い意味でその人がそれをもって世の中に貢献する職業ともいふべきものであろう。そういうものをもって、分業社会の一員として、世の中の仕事の一つを果しつつ、社会生活を営んで行くことができるということであろう。一つの中核的なものがあって、社会の一員となることができるであろう。そういう仕事をいくつももって、可能の人というのはあるまい。最近のように科学、技術が進んで来ると、

そのどこかの専門において一生をかけて探求すべきほどの仕事がある。何もかにもというわけに行かない。他のことは他の人がやってくれる。他の人が自分のできないことをやってくれるであろう。そういうことを認めて、調和してゆけることが人間の生活として、円満な生活をおくる所以であろう。たとえていえば、人間は夫々凹凸がある。それをお互いに補足しあつて、全体としての社会ができあがるのである。そういうことを認めて、その個性、特色を生かすことに全力をあげ、他の人々の恩恵に浴していることを認めることができることが、円満なる生活であろう。つまり発達するのは一面であるが、それを柱として、全面的な調和が成り立っているのである。こういう全面的な発達の構造化が忘れられると、平板な単細胞的な羅列主義におちいるのである。全面発達論の甘さである。

四

教育の方法がまた全面発達の理想をゆがめている。今の教育は、人間を発達させるのではなく人間に何かを注入しようとしている。注入というのは、ただ一回話して聞かせるということである。わからせるといのは、そういうことだと思っている。教室でわかったか、

おぼえておけという言葉位よく使われる言葉はないが、それは具体的には何を意味するのだろう。わかったかというのは、わかったと思うだけのことでしかない。おぼえておけと言ったり、おぼえておきますと言ったとしても、口先だけのことでしかない。一体おぼえておくというのはどうすることなのだろうか。おぼえておくつもりになつておぼえられるのならやさしいことだが、そんなことは誰にもできはしない。

そういう考え方で、わからせたら教育になると思つているが、そんなわかつたと思わせる位のこと、人間の発達はなかなかなしとげられるものではない。しかしそういう錯覚の上に、あらゆる教科の教育が成り立つと考えている。それですべて通り一べんの教育をすれば全面発達になるという極めて結構な理論が成り立って来る。これは全面発達の理想を達成する条件である教育方法、教育内容に対する考え方の弱さである。

どの道に対しても本当に、人間を発達させようとしたら、相当の努力が必要だということをもつとよく知るべきなのであろう。日本人の平均教育の水準はほぼ小学校四年程度だといわれている。これはごく大ざっぱな笑い話の程度のこととしても、九年の義務教育、

ないしはその中の七〇%が更に高等学校までという十二年間の教育を受けた結果だとすると、日本人全体が小学校四年の教育水準に到達するのに大変な努力をしていることになる。人間の発達とはそういうものではないかと思う。全面発達という耳ざわりのよい言葉に酔うことなしに、もっと具体的に、底の底までほりさげて考えてみる必要があるのではないか。

人間が発達するとは、結局きわめて平凡だが頭脳と身体が発達することで、それは訓練し、鍛えなければでき上がらないのである。頭を使い、身体を使わなければならない。頭を使うとは、人の話を聞いているということではなく、自分で論理をくみため、材料をならべ整理を試みることである。それを自分の責任においてしなくてはならないのである。思いつきで物を考えるのではなく、これまで社会がつみあげてきた自然科学や社会科学の論理に従つてものを考えるのである。そういう筋にのつて物を考えるには、それになれ親しまなくてはならぬ。何回もくりかえし、自分だけだつてみなくてはならぬ。自分で納得して行かなくてはならぬ。そこには一寸の甘さも許されない。無情なほどきびしい修練が必要である。人の話をぼんやり、無責任に聞いて

いるようなことではとても、本気に考えるようにはならない。あくまで自己の責任でやらせなくてはならない。学習とは孤独なものである。およそ人間の発達とはあらゆる面の発達について、そういうきびしさが必要である。教科の学習でも、道徳性の形成でも、情操の教育でも、全面的にもっときびしさがなくてはならない。それは外面的な、暴力的な、圧力的なきびしきでなく、精神活動の緊張という点できびしいのである。

そういう厳しさのない全面発達というのはくらげのような骨なしの人間を夢みることになるであらう。

《国立教育研究所》